『帝国風景の歴史性と内生性 —国木田独歩文学研究』

Koku ZUI(国蕊: Professor, School of Foreign Languages, Northeastern University)

✉ ggrrrrsw@163.com

(中国) 東北大学外国語学院日本語学部教授。中日近現代比較文学、翻訳文学専攻。近著に「原抱一庵による『造人術』の全訳及び両版本に対する一検討」(北京:『魯迅研究月刊』, 2020)、「近代文学における日本重訳作品の底本に対する考察——陳景韓の重訳活動を例にして」(『文学評論』, 2019) など。

The Historicity and Internality of the Imperial Landscape : A Study of Doppo Kunikida's Work

This book is an outstanding academic study of modern Japanese literature in China. It has been published by Sichuan University with the support of the central university research fund. It examines the work of Doppo Kunikida, a famous writer in the Meiji era in Japan, particularly “Aitei Tushin” (Letters to my beloved brother), “Musashino” and other works, and uses a large number of Chinese and Japanese documents and historical materials to explore the relationship between Kunikida's literary output and the development of imperial Japan. The text also places Kunikida in the context of the multiple connections of Japanese literature with Chinese and English literature, and reinterprets his work from the interdisciplinary perspectives of media studies, discourse analysis, geography and translation studies. This can constitute a break with the conventional narrative surrounding Japanese literary history, and prompt relevant Japanese studies to incorporate the Chinese context.

Keywords Kunikidado(国木田独歩), Modern Japanese literature(日本近代文学), Musashino(武蔵野)

国木田独歩は日本近代文学史上特別で複雑な存在である。明治時代末期、彼は島村抱月などの自然主義文学者にその陣営に引き込まれようとしたことに対して否定していたものの、「自然主義」はその時から氏の代名詞となり、生涯を貫いて付きまとい続けた。大正時代に入ると、国木田独歩の人道主義的側面が評価され、その評価は更に中国文壇にも影響を及ぼした。国木田独歩は中日甲午戦争(日清戦争)と日露戦争に積極的に参加していたが、第二次世界大戦後、竹内好などの研究者は「よきナショナリズム」という点から氏への再解釈を試み、情け深い人道主義者として評価した。

国木田独歩は1871年に生まれた人で、いわゆる「1868年の世代」である。その時代に生まれた人の共通点は「自分」と国、社会、伝統及び西洋との間の関係にいかに対応するかという問題に向き合わなければならなかったところにある。劉凱はこういう視点に立って著書『帝国風景の歴史性と内生性—国木田独歩文学研究』で、国木田独歩を変わらない実体として見るのではなく、当時の歴史環境の中において検討を試みた。今までの研究では独歩が甲午戦争の被害者としてとらえられがちであったが、劉凱は氏の文学活動が甲午戦争の報道としての「愛弟通信」から始まったのだという問題を提起した。

著者は第一章で国木田独歩が書いた中日甲午戦争の報道「愛弟通信」に焦点を当てた。『国民新聞』の従軍記者としての独歩は革新的に、家族への手紙という形で戦況の報道方法を作りだし、『国民新聞』のために大勢の読者を獲得した。これは戦争を報道したというより、むしろ「創造」したといっても過言ではない。この章はテキスト分析を通して、国木田独歩の戦争叙事と天皇制国家権力体制との間に存在する関係を考察し、新しいニュースメディアが如何にして「手紙」の形で、読者の戦争参加意欲を掻き立てたかということを論じた。また、独歩の戦争描写から、氏の心の揺ぎや躊躇も読み取り、その文学の複雑性と矛盾性を分析してみせた。

甲午戦争後、国木田独歩は東京郊外の渋谷村で有名な散文「武蔵野」を書いて、「大日本帝国の風景」に対する斬新で近代的な見方と書き方を生み出した。この問題について、著者は第三章で「武蔵野」を中心として考察した。これまでの純文学視点と理論的な解説と異なり、第三章では宏大な歴史的視点から作品を再検討した。「武蔵野」の単純な風景描写と叙情のうらには志賀重昂、内村鑑三などによる地理学著作との関連性が潜んでいると同時に、甲午戦争や北海道殖民運動にかかわった氏の経験も積み重なっているとして、当作品の「先行テキスト」が数多く存在したことを確かめた。これを土台にして、第四章では国木田独歩の内面世界に注意を注ぎ、氏の文学が成り立つ経緯を改めて整理し、その生涯を貫く文学の連続性と各段階の特殊性をも考察した。

最後の一章では、著者はアングルを五・四運動時代の中国に移し、比較文学の研究方法を採用し、国木田独歩の作品を最初に中国文壇に紹介した周作人と夏丏尊の訳本を手掛かりとして、独歩の文学が近代中国に伝播されてきた複雑な旅を辿った。周作人は相馬御風と江馬修を通して国木田独歩を知ったのであるが、独歩に関する評価は主に江馬修の人道主義観によるもののため、「人道主義的文学」と「庶民文学」として「少年の悲哀」と「巡査」を翻訳したのである。これに対して、夏丏尊は宗教的感情と女性問題に対する関心によって「女難」「第三者」「夫婦」「牛

肉と馬鈴薯」などを翻訳した。そこには、五・四運動以降の女性解放という社会環境にいた夏丏尊が女性への理解を表す作品を選択した動機がうかがわれる。このようにして中国に伝わった国木田独歩の文学は、日本自然主義と人道主義の影響を受けたものとして受容され、戦争との関係について一言も触れていなかったのである。

本書は独歩文学を個人と国家、社会、及び歴史との複雑な関係のなかで捉えなおすことを通して日本近代の帝国風景の歴史性と内生性を発見しようとしたのである。紙幅の関係で、本書では中国における1950年代以降の受容や欧米での受容について言及されていないが、「日本近代文学」を「世界文学」の一部として捉えた場合、こうした課題をさらに研究していく必要があると思われる。それによって国木田独歩文学の新しい側面を浮かび上がらせることができるのであろう。

『帝国風景の歴史性と内生性—国木田独歩文学研究』
(2020.09)